

## 黄檗派のインパクト：『禅林執弊集』を通して

陳継東

周知のように、黄檗宗が日本仏教の一つの独立した宗派として認められたのは明治初期のことである。それまでは「黄檗派」と呼ばれるのが一般的であった。隠元隆琦(1592-1673)を始祖とする黄檗派の日本での展開は、当初から日本仏教界の大きな関心を集め、やがて強い反発が現れるようになった。それを端的に示しているのが『禅林執弊集』と『黄檗外記』である。前者は臨済宗の僧の桂林崇琛(1652-1728)が「花園末葉亡名子」と名乗って、元禄十三年(西暦1700年)に書いたもの、後者は臨済宗の僧の無著道忠(1653-1744)が享保五年(西暦1720年)に書いたものである。この二書はいずれも隠元の死後数十年後に著され、黄檗派の禅思想や作法・規範について、その是非を一々指摘している。丁度、黄檗派が次第に日本の禅林のなかの一勢力として定着しつつあった時期でもあり、この二書の批判から、逆に黄檗派が江戸仏教に与えた強いインパクトを読み取ることも可能であるが、この点に関して、従来の研究では十分な関心が払われていないと思われる。本稿は、『禅林執弊集』を中心に、その批判の中から、黄檗派が江戸仏教に与えた影響を具体的に考察しようとするものである。

### 一、黄檗派の批判書

隠元の日本渡来は、長崎を中心とする日本在住の大陸の僧俗や日本の関係者の協力で実現したものである。隠元の禅法の斬新さや個人的な魅力に惹かれて帰信する日本の禅僧や幕府の高官が現れ、後水尾法皇からの支持も得られ、ついに京都近辺に黄檗山万福寺が創設され、黄檗派の歴史が始まった。しかしながら、それと同時に、江戸仏教界には隠元と黄檗派に対して懐疑的・批判的・対抗的な動きも存在していた。

隠元が長崎に着いた翌年、長崎在住の医者に向井元升は、「捨捨奴」という筆名で『知恥篇』(1655)を著し、神道や皇室中心の立場から隠元の来日に対して猛烈な反発の議論を展開した。その一節によれば、昨年七月初めに黄檗隠元が渡来してから、先を争うように隠元を拝みに訪れた僧俗は千人以上に登り、来訪する日本僧が悉く和僧の風儀を改め、誦経称名・言語礼節から飲食衣服まで一変してしまっているばかりでなく、隠元自身もこの国でその仏法を永遠に弘めると宣言しているから、それは神国日本の文化を転変させようとするものであり、自分は関西僻地の浅学の者ながら、神日東照の暖かい光を負うものとして、一日本人として、このことの深刻さに恥を感じ、この『知恥篇』を作ったという。

しかし、『知恥篇』は隠元の禅仏教を分析した上での批判ではなく、あくまで一年間自分が目にした隠元の巨大な影響力が日本社会へ与えるインパクトを危惧して、神国や君子国である日本を守らなければならないと主張するものであった。それに対して、『禅林執弊集』と『黄檗外記』は、禅宗の立場に立脚した仏教内部からの黄檗派批判であり、より豊富な内容を含んでいる。

『禅林執弊集』は、桂林崇琛によって元禄 13(1700)年に書かれた。その序文の内容は概ね以下の通りである。

禅が日本に伝わってから二十余の宗派が生まれた。その中では、道元が先駆者であり、隠元・心越が最後である。これらの宗派の中には、三・四代しか伝わらず消えてしまったものもあれば、十代以上伝わり続けているものもある。法脈がある程度全国的に広がっているように見えても、後継者が凡庸で称賛に値しないものもある。そのため、禅風は日に日に衰頹し、叢林規範は正しく機能していない。これは命数なのか、時運と言うべきか。たとえ臨済徳山が再生しても、どうしようもないであろう。私は自分の愚昧を顧みず、口業を惜みず、この書を著して同じく危機感を持つ友に示す。これを『禅林執弊集』と名付ける。

総体としての主旨は、日本の禅仏教の衰退は隠元と黄檗派による所が大きい、という批判である。

『黄檗外記』は『正法眼蔵僭評黄檗外記』の略称で、無著道忠が1720年に著した。この書は道忠が隠元招聘に密接に関わった師の竺印禅師から聞いた話をまとめたものであり、紙幅は短い。内容は、師の竺印が隠元の招聘や日本の定住のために骨を折ったにも関わらず、隠元に裏切られた経緯が主である。例えば、隠元は何度も帰国すると言いながら、中国国内の情勢不安定を口実に、日本定住と建寺を幕府に働きかけてもらうよう竺印に頼んだり、幕府の要人や法皇の謁見を求めたりしたといい、隠元の不誠実かつ野心的な人物像を描いている。また、斎の時に、飯盤を落として飯粒を地にばら撒いてしまった修行僧を見て、隠元は嘲笑して、「桶の底が脱落した」と揶揄したとし、それを隠元の軽薄さの現れとしている。更に、不実な人々を寺に入らせ、食事を提供して、ついに門徒にしたことも、既存の仏教界の規律を乱す行為であった、と厳しく非難している。総じて、隠元の人格上の問題、禅風のあり方や江戸仏教の既存秩序の破壊などの面から、隠元と黄檗派を批判したものと言える。

## 二、『禅林執弊集』から見られる黄檗派の衝撃

『禅林執弊集』は二十二項目から成るが、更に『続禅林執弊集』が有って十五項目、総計で三十七項目有り、問答の形でテーマごとに論旨が明らかにされている。その黄檗派批判は主に、隠元渡来の目的、作法、禅思想をめぐる展開されている。

まず、隠元渡来の目的である。『続』の「長崎人明僧を招くの弁」の項目に掲げられた質問は、明の人が長崎に作った東明山興福寺・分紫山福濟寺・聖寿山崇福寺の三寺は、代々明僧が所有しており、住職を選ぶ際には明から商船で迎えて来ている。時には僧侶や僧侶とは言えない「禿居士」を連れてきたこともあるが、隠元・木庵らは明の国で既に大衆の前で説法をした素性の確かな僧であるから、本邦に入ったのは、法のために身を忘れた行為と言うべきではないか？この問いに対する答えは、隠元・木庵・即非・高泉らは確かに近年の明国の優れた僧ではあるが、「一錫飄然として軽く此の土に来た」のは、決して法のために身

を忘れたというものではない、というもの。なぜなら、隠元の師の費隱通容（1593-1661）は、曹洞宗の鼓山湧泉寺の永覚元賢（1578-1657）との間に宗趣の争いが有って、官庁に訴えられるに至っており、隠元一派はその屈辱から志を失い、長崎の商船の招聘に応じて遠く日本に来たに過ぎないからだ。つまり、隠元らは、中国仏教宗派間の紛争に巻き込まれることを避けるために長崎に逃げてきた、ということである。これは明らかに、隠元及び弟子らが「法の為に東来」したと自ら説明していることに対する非難である。隠元の来日理由をめぐっては、平久保章によれば上の二説の他に、王朝交替による「避難説」、「家綱招請説」、「長崎奉行招請説」等があり、さらに鄭成功の清朝抵抗と絡む「日本乞師説」さえも提起されている。隠元の来日目的を問うことは、日本において隠元によって創立された黄檗派の正統性に関わる大問題であり、『禅林執弊集』の著者はその重大さを十分に理解して、既存の日本禅宗に脅威となっている黄檗派を排斥する格好の材料にしたのだ、と見ることができる。

つぎに、黄檗派の作法についてである。日本仏教各宗派の儀礼作法は、浄土系と日蓮系を除けば、ほとんど中国仏教に由来するものであるが、明末清初・江戸時代になると、海禁と鎖国政策によって両国仏教界の交流が次第に難しくなり、日本僧の中国渡航は困難となり、日本僧が中国仏教の在り方を直接に体験する機会が失われた。隠元の到来は、まさに中国仏教に接する格好のチャンスとなるはずであった。しかし実際には、隠元及び黄檗派が実践していた日常的な儀礼作法が、日本の禅門行事と大きく異なったため、日本側がこれに反発してしまう結果となった。『禅林執弊集』は、その納得し難い相違を示したうえで、古来の伝統に背くものとして厳しく批判している。ここでは、幾つかの例を取り上げて紹介していく。

第一は、唐音と和音の弁である。古来、日本仏教の諸宗派が伝習してきた經典呪文の発音は唐音だったが、長い間にそれが失われた。明僧が来朝して初めて親しく唐音を聞くことができたのだから、幸いなことではないか？という質問に対して、『執弊集』の著者は、甚だしい愚問だ、と反論している。理由は、日本で千余年来「諸宗が互いにみな伝習してきた内外典籍及び一切の文字はみな唐音」に他ならないからである。例えば、「清」という字を「きよし」と読むのが和音であり、「請(ショウ)」と読むのが唐音であって、明僧が「真(シン)」と読むのは「明音なり、韃音なり、唐音にはあらず」という。なぜならば、元明以降、中国は韃靼の天下になり、「身を文り髪を断ちて言語文章もまた北狄に変じること夥しい」からである。一般的に、唐後期から日本に伝わってきた漢字の読音は唐音と称されるが、明清の音韻字句も唐音・唐話と呼ぶのが普通であるが、『執弊集』の著者は唐音と明音を区別し、それを北狄の影響で劣化したものとしている。明清が韃靼によって夷狄化されたという認識は、「華夷変態」説として、この時代に広く見られるものである。

第二は、木魚という法器の使用である。古来、經典呪文を唱える際には、鈴を鳴らしていたが、今は木魚や太鼓・どらなどを鳴らすように変わったのはどういうことなのか？という質問に対して、これはやはり「明末愚昧な禅徒がみだりに他人の耳を悦ばせたもので、却っ

て百丈禅師の万世不易の叢林清規を忘却するもの」だ、と非難している。日本での木魚などの法具の導入と普及は、黄檗派によってもたらされたものであった。この批判から、この新たな法具法式が定着するまでには、激しい抵抗があったことがわかる。

第三は、仏前で僧が帽子を被ることに対する批判である。それによれば、僧には帽子を被るべき時と脱ぐべき時があり、それを履行してこそ礼に適うのだが、近来、明僧は我が国に入ってから、尊卑を分かつず、四時を択ばず、みだりに帽子を被る者が有る。これは明末の放逸無慚な僧の慣習によってもたらされた弊害であり、黄檗派も例外でなかったという。対して、日本の古叢林では幸いに今も「旧規が存している」と指摘している。この非難からは、黄檗派の服装礼儀が江戸仏教へも影響を与えていることが窺える。

第四は、礼拝のあり方である。近来の明僧は、礼拝の際に侍者にその坐具を敷かせているが、それは古の規範に適うことか？という質問に対して、古には有ると雖も、実は礼ではない、と批判した。仏前や目上の人への礼拝に際して、他人に坐具の用意を求めるのは傲慢不遜であり、近代以来因襲によって弊害になっているので、このような叢林家風は正さなければならぬと指摘している。さらに、隠元の二つの過失を取り上げて、黄檗派の作法の拙さを批判している。一つは、隠元は日本に来てから始めて『百丈清規』を目にして、中国で長く失われていたこの稀有の書と出会ったのは誠に幸いだと言っていた。このため、古の規範を知らなかった隠元のやり方は、当然古来の清規から逸脱している、と批判している。もう一つは、隠元が普門寺に滞在していた時に、上堂説法を除き、念經礼仏、坐禅經行を行う際に常に袈裟を着なかったこと。これも叢林の威儀を損なうことで、日本僧の「如法に威儀を整齊する」様子を見て、明僧も少しずつ慣れるようになったという。この批判からは、黄檗派の礼拝行儀が江戸仏教に浸透すると同時に、黄檗派も江戸仏教の要素を取り入れている状況が読み取れる。

第五は、花押に代わる朱印の使用である。古来、日本僧の墨蹟には花押を用いていたが、近来明僧が日本に来てから、皆花押をやめて刻印(朱印)を使うようになったことに対して、花押は「唐宋の古風」であり、それを貴ぶべきだと答えている。『禅林執弊集』によれば、著者自身ある会合で宋代禅僧の圓悟克勤(1603-1135)の真蹟を拝観したことがあり、その中には花押しか用いられておらず、刻印は無かったし、また陶南村の『輟耕録』に拠れば、元の時代に蒙古人や色目人は筆をとって花押を書くことができなかつたため、象牙や木で作った刻印が使われるようになったもので、「唐宋の我が門の諸老も亦皆花押を用いたことは明らか」と説明されている。江戸前期より花押の使用はすでに減少して朱印が多く使われようになっており、黄檗派はその流れを一層促進したと言える。

第六は、經行という修行法の変化である。現在の明僧は經行を行う時に疾走して息を切らすほどになっているが、これは果たして古のやり方であるか？という質問に対して、「恐らくはそうではない」と否定した。なぜならば、古の言い方によれば、經行は緩やかに歩き、声は低音にするのが肝要である。しかるに、近来明国では禅風が地に墮ち、齋戒も持たず、食事が常に飽満で、静坐するとすぐに心識昏沉にして睡魔に襲われるため、疾走奔馳によつ

てそれを退治しようとするわけであるが、これは狂行であり、経行とは称せない、と批判している。疾走する経行は、日本仏教者から見れば伝統と背く奇異なやり方で、受け入れがたいものであった。

最後に、禅思想について。黄檗派は禅浄双修の立場をとり、『阿弥陀経』を読誦し、「南無阿弥陀仏」の六字名号を唱え、坐禅に励むことを主張する。この考え方は、隠元来日の当初から、日本の禅門から問題点として指摘されている。『禅林執弊集』は、この問題を主要テーマにはしていないが、隠元の孫弟子の著作をとりあげて反論した。木庵の日本人の弟子の潮音道海（1628-1695）は『霧海南針』（1667）を著し、二百年来、日本の禅灯が已に滅して、臨済曹洞の二宗もただ古人の話頭を拾ってみだりに平話（俗語）で解釈し、それを参禅とするが、全く在家の愚俗と異ならず、剃頭の外道と言うべきとして、日本の禅門の現状を激しく批判していた。それに対して桂林崇琛は、旅の途中で出会った潮音が弟子二三人を連れて、旅亭の一茅屋に無知の男女を集め、説法して金銭を得ていたという逸話を出して、その人格を貶めながら、黄檗派の真価を問い質した。それによれば、隠元が日本に入った頃には、彼の思想（所証）の深淺が掴めなかったが、臨済宗妙心派の盤珪・賢岩・頼翁や曹洞宗の愚白・玄光らは全く隠元を認めなかったし、二世の木庵に至って、みなは半信半疑になり、その三・四伝に及ぶと、早くも「七零八落」の状況になっているので、「我が禅唾に嘗める」ことができるものさえもない、とその価値を強く否定している。両者の思想的な対立が妥協できないほどになっていることと、黄檗派のインパクトが如何に激しいものであったかが分かる。

## 結び

隠元及び黄檗派によってもたらされた新たな作法や禅思想は、日本の禅門及び仏教界全体に大きな影響を与えていた。以上の諸例はその一端を示したに過ぎない。『禅林執弊集』を代表とする日本側の反発は、決して単純で偏狭的なナショナリズムによるものではなく、宗祖らが中国から持ってきた古来の伝統を継承すべきかどうかという真剣な思考に基づくものであった。この意味で、黄檗宗のインパクトは、まさに日本の禅宗ないし仏教界全体に変革の機運をもたらしたと言えよう。それと同時に、黄檗派も日本に保存されている古来の伝統を取り入れて、日本の文化の一部となり、ついに一宗派として日本社会に根を下ろしたのである。

（青山学院大学）

### 参考文献

木村得玄編『黄檗宗資料集成』第二巻、春秋社、2015

徐興慶・劉序楓編『十七世紀の東アジア文化交流 黄檗宗を中心に一』、台湾大学出版センター、2018

陳力衛『近代知の翻訳と伝播：漢語を媒介に』、三省堂、2019

平久保章『隠元』、吉川弘文館、1989